

『源氏物語』の尼生活

Nun life of The Tale of Genji

上田 ひかり

Hikari Ueda

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 修士課程

キーワード：女性，出家，家尼

Key words：Women, Priest, Leama

1. 研究目的

『源氏物語』には15人の尼が登場する。当時の彼女たちは、寺院ではなく、それぞれの家にいる「家尼」であった。この語は『小右記』治安三年閏九月一九日条に「前帥室去夕依病出家，家尼」と一例のみある。しかし「家尼」という存在は広く一般化していたと思われる。「家尼」という形になったのは、国分尼寺の衰退によっている。

「家尼」の生活形態については、その様子を詳しく触れた史料は少ない。また、先行研究でも、出家の背景などについては論じられているものの、その尼生活については十分に考察されているとはいえない。

そこで、本研究では『源氏物語』における「家尼」の暮らし方を明らかにし、物語における存在意義や役割を考察していく。なお、横川僧都母尼・妹尼を「家尼」と規定してよいかは、別途考えることにする。

2. 研究実施内容

『源氏物語』内で語られている、女性の出家や尼の暮らしの様子を、養育者としての場合・皇族の場合・宇治十帖の場合・その他の場合の4つに分けて考察した。

<第一章 養育者としての場合>

養育者としての場合は、紫君の祖母尼君・明石尼君・大宮の3人である。

紫君の祖母尼君は、仏道修行の傍らで紫君を世話し、後ろ盾のない彼女の将来を嘆いていた。しかし、臨終の前には、自身が来世で救われるためにも、紫君を、成長したら源氏に託しても良いと考えた。このことから、尼と養育者の二つの立場

で俗世と関わり暮らしていたといえる。

明石尼君は、明石君や明石姫君の将来を心配し、明石の地から京の俗世へと戻り、一族の繁栄を願った。

大宮は、孫の夕霧・雲居雁を気にかけて、二人の仲を取り持っていた。また、玉鬘のことで関係の良くなかった源氏と内大臣との仲裁も行った。玉鬘に対しては、裳着の日に、祖母として祝いの手紙や調度品を贈った。これらのことから、尼でありながらも一族を見守る立場として暮らしていたといえる。

<第二章 皇族の場合>

皇族の場合は、藤壺・六条御息所・女三宮の3人である。

藤壺は、桐壺院の供養を理由として出家した。出家後は、源氏との密通の罪を償う他に、冷泉帝の将来が安泰したものとなるよう、本格的な仏道修行をしていた。また、源氏と囚って梅壺女御を入内させ、冷泉帝の後宮争いが関わる絵合にも力を入れていた。このことから、出家しても母親として我が子を守る姿勢を見せた。

六条御息所は、死を意識し、伊勢の神域にいたことから生じた、仏に対する罪を償うためにも出家した。出家後は、残される娘のことを思って源氏に託した。

女三宮は、柏木との密通の罪に恐れをなし、男女関係から逃れるために出家した。出家後は、持仏開眼供養によって出家者としての道を本格的に歩むことになった。また、仏道修行をすることで、源氏から遠ざかろうとした。

<第三章 宇治十帖の場合>

宇治十帖の場合は、弁尼・横川僧都母尼・妹尼・浮舟の4人である。

弁尼は、出家前は薫と大君の仲を取り持っていた。しかし、大君の死でそれは叶わなかった。出家後は、浮舟との仲立ちを引き受けた。

横川僧都母尼は、息子の僧都の世話をしていた。しかし、高齢のために妹尼へと引き継がれたと見られる。一方で妹尼は、娘の死を受けて出家し、このことは尼生活とも深く関わっていた。仏の導きとして、倒れていた浮舟を引き取った後は甲斐甲斐しく世話し、また、中将との結婚の仲立ちを行った。そして、薫が行った浮舟の法要の際には、偶然の依頼を引き受けて法衣を整えていた。これらのことから、彼女たちは、僧都の世話を主として行っていたけれども、浮舟の存在によって「家尼」のような立場にもなっていた。

浮舟は、薫と匂宮との板挟みから入水するも助けられ、自身の境遇を回顧する中で、男女関係から逃れようと出家を強く望んだ。出家後は、ただひたすら救われるために、法華経などの経典を多く読むといった仏道修行に励んでいた。また、手習をすることによって過去への清算を行った。彼女の尼生活は、彼岸を目指すために、横川僧都から薫との結婚を勧められても、決して応じないという強い意志の基に成り立っていた。

<第四章 その他の場合>

この章においては、用例が少ない空蟬・女五宮・源典侍・朧月夜君・朝顔齋院の5人を見ていった。

空蟬は、夫の死後、継子である河内守からの懸想を避けて出家した。出家後は、源氏の庇護の下で安定した尼生活を送ることになっていた。

女五宮・源典侍は老齢による出家と見られ、時々源氏の来訪を、尼生活を過ごす上での慰めとしていた。

朧月夜君は、朱雀院の出家を受け、自身も同じ道を歩んだ。一方で朝顔齋院は、六条御息所と同様に、仏への罪の意識から出家したと見てよい。

4. まとめと今後の課題

以上『源氏物語』における尼生活を見ていった。

養育者としての場合は、家族と縁を切らないことによって俗世と関わりながら暮らしていた。

皇族の場合、藤壺は、桐壺院菩提を主としており、これは、皇妃としての典型的な例であった。しかし、実際は、冷泉帝のことなど様々な思いを抱いて暮らしていた。六条御息所は、神域にいたことから、仏への罪の意識を抱いており、このことは、朝顔齋院と共通していた。

宇治十帖の場合は、俗世を離れたいと願う浮舟を、彼岸へ到達できるか否かを課題としていた。

その他の場合は、来世を念じて出家することを目的としている者がほとんどであった。

今後の研究課題としては史実における「家尼」たちの様子や、信仰の質なども検討していきたい。

付記

本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所の研究助成 (DB3002)「平安文学における尼生活」を受けたものである。

主要参考文献

- [1] 西口順子『女の力—古代の女性と仏教—』(平凡社, 1987. 8)
- [2] 勝浦令子『女の信心—妻が出家した時代—』(平凡社, 1995. 5)
- [3] 光華女子大学・光華女子短期大学真宗文化研究所編『日本史の中の女性と仏教』(法蔵館, 1999. 11)
- [4] 三橋正『平安時代の信仰と宗教儀礼』(続群書類従完成会, 2000. 3)
- [5] 曾根正人『古代仏教界と王朝社会』(吉川弘文館, 2000. 9)
- [6] 勝浦令子『古代・中世の女性と仏教』(山川出版社, 2003. 3)